HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日韓漢語動詞における通時的対照研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	趙, 恵真
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12957号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70219
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Cho_Hyejin_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　趙　恵　真

学位論文題名
日韓漢語動詞における通時的対照研究

・本論文の観点と方法

漢語を動詞化したものを通常、漢語動詞という。漢語動詞の形態は、日本語では「漢語+スル」、韓国語では「漢語+hada」がもっとも一般的である。従来、漢語動詞に関する研究は、日韓両言語それぞれにおいて盛んに行われてきたものの、対照研究としては主にヴォイスに焦点が当てられ、その形態的対応関係を捉えようとするものが主流であった。

本論文は、このような研究背景を踏まえたうえで、通時的研究の観点を取り入れた考察を行うことにより、各時代における漢語動詞の形態的特質を捉えることはもちろん、漢語動詞の形成されるプロセスや漢語動詞の形態変化の様相まで明らかにすることを目的としており、さらに対照研究の観点から両言語漢語動詞の類似点や相違点を浮き彫りにしながら、その特質について考察を行ったものである。

・本論文の内容

本論文は、全六章から構成される。第一章は、序論として研究の背景や研究目的、研究方法を述べており、第二章では漢語動詞のみではなく、本論文に関わる漢語、動詞の「スル」と「hada」、機能動詞など本研究と関わる先行研究に関して紹介し、第三章では、日韓漢語動詞の形態的特質や両言語にみえる相違点と類似点などを対照考察したうえで、本論文での漢語動詞の定義について述べている。第四章では、主に一字漢語動詞と二字漢語動詞を対象にして各時代における形態的特質を明らかにし、さらに通時的な形態変化の様相について考察を行っている。第五章では、韓国語漢語形容詞について、漢語動詞と照らし合わせながら、その意味的、形態的特質について述べている。第六章では、本論文に述べてきた内容をまとめたうえで、今後の研究課題についても言及している。

章ごとのより詳細な内容は、以下の通りである。

第一章では、本研究の背景として、従来の日韓漢語動詞における対照研究は、主に漢語動詞のヴォイスの対応関係に焦点を当てた研究が主流であったこともあり、漢語動詞の形態的特質を時間軸に沿って連続的に捉えるという通時的視点から捉えた研究は、未だに行われていないのが現状であることを指摘している。さらに本研究の目的について述べたうえで、時代の区分、用例収集の方法、用例の示し方、表記や論文の構成について紹介している。

第二章では、漢語動詞のみでなく、漢語に関する従来の捉え方と日韓両言語の「スル」と「hada」を含めた機能動詞に関する先行研究など本研究と関わる先行研究を網羅して紹介している。

第三章では、先ず日韓両言語における漢語動詞の形態的特徴について考察を行ったうえで、本論文での漢語動詞に対する捉え方として「動作性を帯びて述語的な意味をあらわす漢語に、実質動詞としての語彙的意味よりは主に文法的意味を持っていると思われる機能動詞（代表的なものがスルと hada）が組み合わさって形成されているもの」であると定義づけている。

日本語の「スル形」二字漢語動詞に対して、韓国語は「hada 形」漢語動詞が対応する場合がもっとも一般的ではあるが、「hada」以外の後部要素を持っている「他形」の漢語動詞も存在する。日本

語は「スル形」のみで「他形」は観察されていないのに対して、その「スル形」に対応する韓国語は、「hada 形」以外にも「doeda 形」、「sikida 形」「gada 形」「jisda 形」「nada 形」「chida 形」などがある。これらの後部要素のうち、典型的な機能動詞は「hada」であり、「doeda」は「hada」と相補分布を示しているため、同じく機能動詞であると考え、「hada 形」と「doeda 形」を韓国語における漢語動詞の形態として見做している。その他の後部要素「sikida」「gada」「jisda」「nada」「chida」は、それ自体が実質動詞として意味を持っていると解釈でき、また前に付く漢語の意味からも動作性を帯びていると解釈しにくいため、漢語動詞として認めていない。

一字漢語動詞は、二字漢語動詞と同様、主に「スル形」と「hada 形」が対応してあらわれるが、韓国語には他にも「他形」が出現している。さらに、否定の活用形における語形変化の形を例にあげるなどして、一字漢語動詞は二字漢語動詞より、漢語と後部の「スル」、「hada」との形態的結合力が強いということも明らかにした。

第四章では、歴史的な文献から収集した資料に基づいて、各時代における漢語動詞の形態的特質や時代による変化の様相について考察を行った。その結果、二字漢語動詞に対しては、次の三つの特徴を浮き彫りにすることができた。第一に、すべての時代を通して、日本語「スル形」と韓国語「hada 形」が対応しており、漢語動詞の形態は日韓両言語とも変わらず漢語の後部に「スル」と「hada」で現れている。第二に、一律に「スル形」で現れている日本語に対して、韓国語の方は、主に「hada 形」が生起しているものの、前期現代語では「hada 形」と「他形」が共存したもののうち、現代語になってからは「「他形」のみあらわれるものがある。第三に、日韓両言語で一語のみ観察されるものであるが、漢語「故障」の場合、前期現代語では日韓語両方とも助詞を伴い、句としてあらわれているが、現代語になってから日本語では「スル形」が、韓国語では「他形」が使用されている。

一方、一字漢語動詞の場合は、活用形における語形変化の形から二字漢語動詞とは異なる点があることがわかった。また、一字漢語動詞は現代語において両言語とも消滅している例が観察され、一字漢語動詞が消滅するか残存しているかには、類義語の存在の有無が関わっていることがわかった。即ち、類義語の存在しない一字漢語動詞は現代語においても残存しているに対して、類義語の観察される場合は、一字漢語動詞は消滅し、類義語が使用されていることが確認できた。一字漢語との類義語として、主に固有語動詞が挙げられるが、二字漢語動詞の場合もある。即ち、一字漢語動詞と類義語固有動詞との競争で、固有語動詞の方が優勢で生き残ったとも解釈できる。

第五章では、韓国語「漢語形容詞」についての考察を行っている。「hada 形」を取っており、漢語動詞とは表面上は同じくみえるものの、意味的にも形態的特質からも「動詞」とは見做しにくく、どちらかというと形容詞的性を示しているものに対して、本論文では「漢語形容詞」として定義している。ここでは、韓国語漢語形容詞の形態的特徴について述べたうえで、日本語との対応についても考察をおこなっている。漢語形容詞は、主に「hada 形」であるが、「他形」も存在する。漢語の後部に付くのは、機能動詞の場合もあり、派生接尾辞の場合もある。韓国語の漢語形容詞に対応する日本語「スル形」に対して、アスペクトテストを用いた分析を行った結果、形態的には動詞として現れているものの、漢語は状態性のアスペクトを持っているか、あるいはアスペクトがあらわれていないということが確認でき、日本語においても典型的漢語動詞とは違いがあることがわかった。

最後に第六章では、結論として全体のまとめと今後の課題を述べて、本論文を締めくくっている。